市民によるモダニズム建築群の保存活動を通して醸成される社会的価値

ー青森県弘前市に集積する8件の前川建築を対象とした市民活動に着目してー

RESEARCH ON FOSTERING SOCIAL VALUE OF GROUP OF
POSTWAR MODERNISM ARCHITECTURE CONSERVED BY CIVIC ACTION

A case study of civic action seen on 8 buildings planned by Kunio Maekawa in Hirosaki city

小野 ちれか*, 後藤 春彦**, 佐藤 宏亮***, 山崎 義人****

Chileka ONO, Haruhiko GOTO, Hirosuke SATO

and Yoshito YAMAZAKI

Considering serious losses of postwar modernism architecture in Japan, this study aims to clarify a social value fostered by civic action.

Noteworthy example were found in Hirosaki City, Aomori Prefecture. 8 buildings planned by well known architect called Kunio Maekawa, which are communal facilities located in middle of the city, were conserved in particular way by citizens.

By the research, it revealed that these group of buildings were playing an important role by being a group of life-stages of the citizens.

This means that these buildings contains cumulative life-histories of people, which helps people to look back history of themselves and the city. Also by using this networks of accumulative life-histories, the value of these buildings were developing in a sustainable way.

Keywords : Group of Buildings, Related Cultural Assets, Local City, Postwar Modernism Architecture, Culture Value, Civic Organization

建築群, 関連文化財, 地方都市, モダニズム建築, 文化的価値, 市民組織

1 章 はじめに

1-1 研究の背景

近年全国で未指定文化財が急速に失われているのを受け「地域における歴史的風致維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり新法）」（国交省・文化庁・農水省共管）、「歴史文化基本構想」（文化庁）等、地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物や周辺環境を総合的に保存・活用していくための法整備や運動が進められている^{注1)}。また、それらを推進する上で、市民と行政が一体となった取り組み体制の構築が必要とされており、現在各自自治体に取り組んでいる。

このように、我が国では歴史的建造物に関する文化財保護制度の整備が進んでいるが、一方で、近代に建設された建築物に関する保護制度は欧州各国と比較して遅れている。未指定文化財の中でも、特にモダニズム建築^{注2)}の喪失は深刻であり、社会的文化的価値の有無が十分に議論されないまま取り壊しが相次いでいる。

1-2 研究の目的

地域のアイデンティティの核ともなる文化財を総合的にとらえる取り組みが緊急の課題とされる中、その方策として「関連文化財群」という概念が文化審議会^{注3)}により提言された。これは、地域に存在する様々な文化財を、歴史的、地域的関連性等に基づいて、一定のまとまりとして設定するものであり、地域の歴史や文化を語る重要な資産として、総合的に保存・活用していくというものである。

「関連文化財群」も、江戸から明治にかけての古代の文化財を対象とした提言であるが、本稿では複数のモダニズム建築が現存している地域の事例調査を通し、ある関連性（ネットワーク）を持つ建築物の集合体を建築群と捉える。その上で、1人1人の記憶とライフヒストリーが建築群に宿っている事を明らかにする。更に、その結果をもとに分析を加え群として存在するモダニズム建築を対象とした市民活動が行われる事により醸成される社会的価値を明らかにする事を目的とする。

1-3 研究の方法

調査及び分析は、以下の方法で行う。2章では、調査対象地、建築群、市民団体、対象地行政の取り組み概要を述べる。3章では、市民団体会員へのヒアリング、アンケート^{注4)}、及び文献調査により人々の記憶が各建築に関連付けられており、建築群に宿る人々のライフヒストリーを明らかにする。4章では、この建築群を対象とした市民活動が発生した経緯を、団体会員を対象とした調査により明

図1 研究のフロー

* (株)ザイマックス 修士(建築学)

** 早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科
教授・工博*** 早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科
助教・博士(建築学)

**** 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 講師・博士(工学)

XYMAX Corporation, M. Arch.

Prof., Dept., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

Assistant Prof., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Arch.

Assistant Prof., INES, Hyogo Univ., Ph. D.

らかにし、その活動実態を5章に整理する。6章では、市民活動が行われる事により会員間で醸成される価値を、会員により執筆された文献の調査と建物に対する認識、及び利用変化から明らかにする。以上の調査と結果を受け、7章では市民による保存活動によるモダニズム建築群の社会的価値、今後の近代建築物の保存に関して考察を8章で述べる。研究の流れを図1に示す。

1-4 既往の研究

近代建築に関する論文は多く見られるが、モダニズム建築に特化した論文は現在少ない。また、そのどちらにおいても研究内容が意匠、修復する際の工法や建築家の論理構造の分析等に関するものが多く、モダニズム建築の保存に関する論文はあまり見られない。

既往の研究として、「近代産業遺産」に関しては各学会で学際的な研究が行われており、建築分野においては近代建築に関する研究を中心とした建築史の分野から1960年代より研究が進められている。近代産業遺産の保存に関しては市原らにより、九州地方の近代産業遺産の現存状況及びその特徴に関する研究、近代産業遺産活用に対する価値判断手法の提示がされている¹⁾。

歴史的建造物群の保全や保存に関しては、これまで伝統的建造物群に関する研究の蓄積が見られたが、近年新たな建築群の概念が提示されるようになり、その概念に応じた手法に関する研究が見られる。清野らは、横浜市における歴史的建造物が景観的に参照関係にある事よりグループとして捉えられとされている²⁾。また、村上らは、歴史まちづくり新法のモデル事業となっている萩市における文化資源の発掘と都市遺産概念に関する研究において、関連文化財群について考察を述べている³⁾。

これらの既往研究を受け本稿は、モダニズム建築物の保存手法の一つとして、群体的に捉えることにより定義され、地域の中で醸成され得るモダニズム建築群の価値について考察する。その上で、官民一体となった包括的な文化財保存に向けた体制の構築が進められる中、市民組織に求められる役割について考察する。

1.5 「建築群」の定義

複数の建築物の集合体を建築群とし、文化財保護の対象とした事例は、欧州の事例を中心に多く見られたが、これらは街路沿いに連なっており、街並や景観を形成している事により価値付けられる、線的保存であった。

一方、国際的組織であるユネスコにより登録対象とされた建築群には、複数の建築物が散在した状態のものもあり、建築物が集中して隣接している事で形成する街並、景観に限らず建築物間の関連性にも価値を置いている事がわかる。近年、世界遺産委員会では、歴史的・文化的・自然的主題を背景として相互に緊密な関連性を持つ複数の文化財を総合的にとらえた上で保護を図る観点が重要になっており、実際の登録も、その方向で行われている。また、ドイツの「ヴァイマルとデッサウのパウハウスとその関連建築群」や「ベルリンの近代建築集合住宅群」など、近代に建設された建築群も世界遺産の登録の対象とされている。

世界遺産委員会により定義される建築群のように関連性を持った複数の建築物を対象とし、保護するような制度は、未だ欧州各国においても事例が少なく、我が国においても模索段階にある。「関連文化財群」の概念はこうした課題が検討された上で提言された。

本稿では、従来の点的保存、面的保存、線的保存に対し、相互に

関連し合う（「関連性」のある）複数の建築物の集合体を建築群として捉える（図2）。

本稿では「関連性」の中でも人々の体験や経験を通し建物が相互に関係をもつ事、市民のライフヒストリー^{注5)}の集積に着目する。「市民が自らの公共の過去を定義できるように支援することが、歴史的な場所に力を授ける鍵である」⁴⁾と、ドロレス・ハイデンは述べているように、近代建築物が社会的文化的価値を得るには、市民にとって公共の過去を定義できる場となる必要があり、市民のライフヒストリーの集積はそれを可能にすると筆者は考える。

図2 ネットワーク保存の概念図

2 事例調査の概要

以上のような関連性がある建物の集合体が存在し、それを対象とした市民活動が行なわれている事例が青森県弘前市に見られた。

2-1 調査対象地の選定

戦前から戦後にかけて建設されたモダニズム建築の中でも、行政所有の公共建築は安全性や効率性が重視されるため、議論が充分にされないまま取り壊されてしまった事例が多く見られる^{注6)}。このような状況の中、青森県弘前市では8件もの近代公共建築が地域の中心部に現存し、それらを活動の対象とした市民団体が存在する。この団体の発足は行政や専門家の積極的な働きかけによるものではなく、完全な任意団体である。モダニズム建築はその歴史の浅さから建築学的な知識を有しない人々にとってその価値の評価がされ難いと言われる中、取り壊し問題が生じる前に市民による積極的な活動が行われている点、その活動対象が地域に散在する複数の建築物を建築群と捉えられている点で特異な事例である。

2-2 調査対象地と建築群の概要

対象地である弘前市は戦災を免れたという経緯からも、城下町時代の都市構造が残されており、弘前城と、古くから人々の信仰の対象となっていた岩木山を中心に町割り、道路、建物の配置計画がされてきた。歴史的建造物が多く残る弘前市では、文化財としてそれらを保存する為、多くの取り組みが行われてきた^{注7)}。

市庁舎、学校、病院、などの公共施設も城を中心として配置されており、これらの多くが前川國男によって設計された。対象地には、

図3 対象建築物の配置図

表1 対象建築群の概要

施設名	竣工年	所在地	用途	建築タイプ	延床面積	建築面積	所有・管理者	文化財登録の有無	備考
① 木村産業研究所	1932年	在府町 61	事務所	RC造 / 地上2階	468㎡	287㎡	財団法人木村産業研究所	国登録有形文化財	
② 弘前中央高校講堂	1954年	市蔵主町 7-1	講堂	RC造 / 地上2階	873㎡	605㎡	青森県	未指定文化財	
③ 弘前市庁舎	1958年	上白銀町 1-1	庁舎	RC・一部S造 / 地上4階	5,629㎡	2,111㎡	弘前市	未指定文化財	
④ 弘前市民会館	1964年	下白銀町 1-6	音楽ホール / 会議室	RC造 / 地上3階地下1階	5,593㎡	3,236㎡	弘前市	未指定文化財	平成8年度 はしな賞ロング ライフ部門受賞
⑤ 弘前市立病院	1971年	大町 3-8-1	病院	RC造 / 地上6階地下1階	8,819㎡	2,463㎡	弘前市	未指定文化財	
⑥ 弘前市立博物館	1976年	下白銀町 1-6	博物館	RC造 / 地上2階地下1階	2,040㎡	1,339㎡	弘前市	未指定文化財	
⑦ 弘前市緑の相談所	1980年	下白銀町 1-1	事務所 / 展示会場	RC造 / 地上2階	868㎡	941㎡	弘前市・財団法人弘前市公園緑地協会	未指定文化財	第9回日本建築家 協会25年賞受賞 (平成22年)
⑧ 弘前市斎場	1983年	常盤坂 2-20-1	斎場	RC造 / 地上2階	1,637㎡	1,708㎡	弘前市	未指定文化財	

前川によって設計された建築物が城下町区域内に8件現存している(図3、表1)。

2-3 調査対象団体の概要

「前川國男の建物を大切にす会(以下『前川の会』)」は、平成16年2月に発足した市民団体である^{注8)}。教育関係の職業を持つ団体代表者が弘前で行われた建築フォーラムに参加した際、元前川建築設計事務所所員と知り合い、話に感銘を受けた代表が講演後元所員に「木村産業研究所を再生したい」と自ら申し出、その後友人に協力と呼びかけたことがきっかけとなっている。当初は木村産業研究所を対象とした講演会やイベントの開催が主であったが、次第に8件の前川建築を巡るツアーが企画されるようになり、活動対象が単体の建築から建築群へと変わっていった。これらの活動を経て、30名の会員と共に会は設立された。活動が進展すると共に会員に専門家、行政関係者、観光ボランティアガイド関係者などが加わり、現在の活動内容は多岐にわたる。これまでの活動資金は、行政による融資等はなく、主に財団による助成金、会費、イベントの収入により成り立っている。^{注9)}平成23年現在では、市が企画した新事業への参加が依頼され、「前川の会」を中心に「(仮)ミニ前川博物館」の計画が進行しており、今後市との関係も構築されてゆく事が予想される。

2-4 行政の取り組みと建築群の位置付け

現在市は、国の歴史まちづくり法の制定を受け、歴史まちづくり

法に基づく計画を策定し、弘前固有の歴史的風致の維持及び向上を図っている。この計画の中では、主に藩政期から明治・大正期の建造物が中心となっており、前川建築のようなモダニズム建築に関する事業は計画されていない。文化財保護担当者、及び都市計画担当者へのヒアリング調査により、その理由として1)歴史的建造物だけでも未指定文化財が多く、抱えきれない状況になる2)コンクリート造や鉄筋コンクリート造の近代建築物は改修が困難な上、莫大な費用がかかる可能性が高い3)行政としては、安全の確保が第一に優先される、等の理由が挙げられた。しかし、計画書の中には複数ページにわたり前川建築に関する記述や図示がされており、『歴史的風致形成建造物の指定方針及び管理指針に関する事項』では「重要文化財と一体となって歴史的風致を形成している建造物」の内、「その他、弘前の歴史的風致の維持及び向上を図る上で、必要かつ重要なものとして特に市長が認める建造物」として「弘前市市役所庁舎」、「弘前市民会館」、「弘前市緑の相談所」、「木村産業研究所」の4件が挙げられている。

3章 8件のモダニズム建築の関連性

調査対象の8件の近代建築には、同一の建築家により設計されたという事他に、地域特有の認識からくる関連性がある。本章では、8件の建築物の関連性に着目し、モダニズム建築群の社会的価値を明らかにする。

建設の流れ（文献調査より） 「母方の郷なのでの っきりした仕事 にしたい」 建築家 「弘前は文化が乏し すぎる。財団を設立し、 産業研究所を建設し よう。まずパリで勉強 を。」 木村村父 → 木村村兄 ↑ 「中央高校の PTAを務めてい る。高校講堂の 設計をお願いし たい。」 ↑ 「実際に建物を見て自ら依頼 に来て頂くのは大変有難い。 健康優良児のような建築に。」 ↑ 「近代的な、人間的な 弘前のまちづくりの一 端となれば幸せ。」 ↑ 「病気の人が集まる場 所だからこそ、あえて 明るくいホールを。」 ↑ 「公園内の環境との調 和に配慮した。」 ↑ 「桜や紅葉の枝を美しく 見せるための勾配屋根と プラン」 ↑ 「岩木山とリンゴ畑と後 の杉山。岩木山をイメ ージした斎場に。」		建設の流れ（文献調査より） 「母方の郷なのでの っきりした仕事 にしたい」 建築家 「弘前は文化が乏し すぎる。財団を設立し、 産業研究所を建設し よう。まずパリで勉強 を。」 木村村父 → 木村村兄 ↑ 「中央高校の PTAを務めてい る。高校講堂の 設計をお願いし たい。」 ↑ 「実際に建物を見て自ら依頼 に来て頂くのは大変有難い。 健康優良児のような建築に。」 ↑ 「近代的な、人間的な 弘前のまちづくりの一 端となれば幸せ。」 ↑ 「病気の人が集まる場 所だからこそ、あえて 明るくいホールを。」 ↑ 「公園内の環境との調 和に配慮した。」 ↑ 「桜や紅葉の枝を美しく 見せるための勾配屋根と プラン」 ↑ 「岩木山とリンゴ畑と後 の杉山。岩木山をイメ ージした斎場に。」		建設の流れ（文献調査より） 「母方の郷なのでの っきりした仕事 にしたい」 建築家 「弘前は文化が乏し すぎる。財団を設立し、 産業研究所を建設し よう。まずパリで勉強 を。」 木村村父 → 木村村兄 ↑ 「中央高校の PTAを務めてい る。高校講堂の 設計をお願いし たい。」 ↑ 「実際に建物を見て自ら依頼 に来て頂くのは大変有難い。 健康優良児のような建築に。」 ↑ 「近代的な、人間的な 弘前のまちづくりの一 端となれば幸せ。」 ↑ 「病気の人が集まる場 所だからこそ、あえて 明るくいホールを。」 ↑ 「公園内の環境との調 和に配慮した。」 ↑ 「桜や紅葉の枝を美しく 見せるための勾配屋根と プラン」 ↑ 「岩木山とリンゴ畑と後 の杉山。岩木山をイメ ージした斎場に。」		建設の流れ（文献調査より） 「母方の郷なのでの っきりした仕事 にしたい」 建築家 「弘前は文化が乏し すぎる。財団を設立し、 産業研究所を建設し よう。まずパリで勉強 を。」 木村村父 → 木村村兄 ↑ 「中央高校の PTAを務めてい る。高校講堂の 設計をお願いし たい。」 ↑ 「実際に建物を見て自ら依頼 に来て頂くのは大変有難い。 健康優良児のような建築に。」 ↑ 「近代的な、人間的な 弘前のまちづくりの一 端となれば幸せ。」 ↑ 「病気の人が集まる場 所だからこそ、あえて 明るくいホールを。」 ↑ 「公園内の環境との調 和に配慮した。」 ↑ 「桜や紅葉の枝を美しく 見せるための勾配屋根と プラン」 ↑ 「岩木山とリンゴ畑と後 の杉山。岩木山をイメ ージした斎場に。」		建設の流れ（文献調査より） 「母方の郷なのでの っきりした仕事 にしたい」 建築家 「弘前は文化が乏し すぎる。財団を設立し、 産業研究所を建設し よう。まずパリで勉強 を。」 木村村父 → 木村村兄 ↑ 「中央高校の PTAを務めてい る。高校講堂の 設計をお願いし たい。」 ↑ 「実際に建物を見て自ら依頼 に来て頂くのは大変有難い。 健康優良児のような建築に。」 ↑ 「近代的な、人間的な 弘前のまちづくりの一 端となれば幸せ。」 ↑ 「病気の人が集まる場 所だからこそ、あえて 明るくいホールを。」 ↑ 「公園内の環境との調 和に配慮した。」 ↑ 「桜や紅葉の枝を美しく 見せるための勾配屋根と プラン」 ↑ 「岩木山とリンゴ畑と後 の杉山。岩木山をイメ ージした斎場に。」		建設の流れ（文献調査より） 「母方の郷なのでの っきりした仕事 にしたい」 建築家 「弘前は文化が乏し すぎる。財団を設立し、 産業研究所を建設し よう。まずパリで勉強 を。」 木村村父 → 木村村兄 ↑ 「中央高校の PTAを務めてい る。高校講堂の 設計をお願いし たい。」 ↑ 「実際に建物を見て自ら依頼 に来て頂くのは大変有難い。 健康優良児のような建築に。」 ↑ 「近代的な、人間的な 弘前のまちづくりの一 端となれば幸せ。」 ↑ 「病気の人が集まる場 所だからこそ、あえて 明るくいホールを。」 ↑ 「公園内の環境との調 和に配慮した。」 ↑ 「桜や紅葉の枝を美しく 見せるための勾配屋根と プラン」 ↑ 「岩木山とリンゴ畑と後 の杉山。岩木山をイメ ージした斎場に。」																					
①木村産業研究所(1932)		②中央高校講堂(1954)		③弘前市庁舎(1958)		④弘前市民会館(1964)		⑤弘前市立病院(1971)		⑥弘前市立博物館(1976)		⑦緑の相談所(1980)		⑧弘前市斎場(1983)																	
市民の証言（調査結果より一部抜粋）																															
「ダンスホールや文化サ ロンのようなモダンな社 交の場だった」 「弘前の当時の文化的活 動の中心の建物だった」 「父や祖父が木村産業研 究所のことを話していた のを小耳にはさんで記憶 にとどめていた」 「この通りを歩いて真っ 白な建物が少々びっくり して立ち止まり、じっくり 眺めていた」 「弘前の工芸の拠点とな って重要な場所になって いる」				「創立50周年事業として、 卒業生と在校生の寄付で 建設された。当時日本初 のモダンな高校の音楽 ホールだった」 「当時は青森一の立派な講 堂だったらしい」 「この講堂にふさわしい人 間になるように、と先生 に言われた」 「20代の頃、よくコンサ ートに行った。ロックから クラシックまで」 「入学後、あまりに立派で 他校からうとまれるよう なことがあった」				「弘前を出る時と戻るとき 必ず利用するためふしめ 思いつく出と重なる面が ある」 「弘前公園の桜まつりの 際、あの頃屋上へは自由 に登れたので、毎年のよ うに登っていた」 「高校の頃、毎日のよう に庁舎前を行き来してい た」				「市民が会館の建設を要望 し、募金を集めて建てた」 「ここでは結婚式がよく 挙げられていたらしい。今 でもそうだった人たちが 昔を思いながら訪ねてく る」 「完成時に東北でも有数の 立派なホールであるとい う話を父が言っていたの をよく覚えていた」 「学校の文化祭等で毎年利 用した」 「弘前大学の卒業式の会 場、コンクリート打ち放しと赤 いドアがすごく印象深か った。まだ建設中だと思 った」 「成人式を行った」				「昔はもっと明るくて、 開放的な病院だったら しい」 「長男を出産した」 「おばあちゃんの見舞 いによく行っていた」 「コンサートがある時は、 病院近くの道路が混む」				「文化都市であるからには、 会館の次に博物館が必要 だ」という市民の要望があ ったらしい」 「レンガがとても美しく、 周囲との調和が素晴らしい と子供ながら思っていた」 「公園の広場から見ると博 物館と市民会館が風景と して一体化してとらえて いた」				「公園の散歩や、桜まつり、 菊まつりの度にその美し さに目をたのませていた だいている」 「毎年桜まつりの期間中 はこのトイレに行ってい ます」 「子供と散歩し、公園を 歩いて、休憩した」 「11時から3時頃にかけ て、いつもの常連さんが 来る」				「父が弘前斎場を建てて いたら死んでたかなと、 ジグザクを話していた。 父が亡くなり斎場を利用 した際に、前川さんの作 品を施工したかったのか なとも思った」 「弘前で死んだらこれな ら魂が安心して岩木山に 帰って行けるという感 を持った」 「友人、知人、親戚の不 幸に際し、訪れている」 「天窓から本当に魂が岩 木山に向かって行くよ うな気がした」			
現況 創設者の甥が所有してい る。建物の一部のみ利用 所や工芸協会により利用 されている。外装もかなり 劣化している。		学校関係者以外は利用不可。 学校関係者の前川建築 であるという意識は高いと 言えず。駐車場利用のため 取り壊しの話もあった。		市民の日常風景の中に あり、現在でも親しま れている。増改築も度々 行われているが、建設 当時の状態を維持する よう配慮がされている。		現在でも多くのイベントで 利用されている他、地域 の多くの学校の行事の中 でも利用され続けている。 建設の経緯に関して知る 人は少ない。		改修後印象が大きく変わ ったため、市民の親し みが薄れた。しかし、建 設当初からあるホール では月に一度ファミリ ーコンサートが行われ、 多くの人が訪れる。		現在も、様々な展示会等 が行われ、市民に多く 利用されている。		四季の祭りや、日常の散 歩の休憩場所として多 く利用されている他、園 芸教室や展示会等で中 高年齢者が出入りする。		主に60代以上の市民に て強く意識されている 場所となっている。																	

図4 建築群の形成過程と地域との関係⁵⁾、^{注10,11)}

3-1 建築群の形成過程と現況

建築群の形成過程と共に、現況を図4に整理した。建築家の地元実業家との出会いに始まり、当時の市長が庁舎を建設するにあたり弘前にゆかりのある建築家を探していた中、木村産業研究所と中央高校の実績もある事から前川に設計が依頼された。その後、建築家と市長の間に信頼関係が生まれ、他の施設の設計の依頼も続いた。この8件の建設が続くと共に、市内の文化施設は充実し、モダンズム建築のデザインや設備の先進性から、市民に大きなインパクトを与えた事が、団体会員の証言からも読み取れる。

3-2 市民のライフストーリー

建築群と団体会員のライフストーリーの関係を明らかにする。「前川の会」会員に活動への参加に至るまでの各建築物との関わり（印象に残っている建物の経験や記憶）やそれらに対する認識について調査を行った。

3-2-1 個人と各建築物の関わり

8件の建築物に対し、関わりがあった建築物と、その当時の年齢、内容を、自由回答式でアンケートを行った。x軸を建設された順に建物、y軸に関わりのあった年齢とした座標を設定し、個人の各建築物に関わった際の年齢に従い記述があった点にチェックを付けた。図5上のように、26件の有効回答をもとに、26パターンの建物との関わりが描かれる。団体活動の経験に関する記述を除外し、各ボックスのチェックの数を合計し、図示すると、図5下のようなになる。

次にチェックの内、建築物の利用経験（建物により構成された空間を利用して何かしらの行為を行った経験）に関するもののみを座標上で表示し各建築物に関する経験内容を「学習関連」、「催事関連」、「仕事関連」に分別し、年代毎に重なるプロット数を表示すると図6のようなになる。

図6上でプロット数が集中している点の集合に着目し、時系列上で位置関係を把握すると、図6下のように年代毎の利用する建築物の推移が表される。この集合の推移は団

図5 世代別の個人と建築物の関わり

図6 建物との関わりから見える市民のライフステージ

体会員のライフステージ^{注12)}であるといえる。

3-2-2 建築群と団体会員のライフストーリーの関係

図7 建築群と団体会員のライフステージ

会員の8件の建物との関わりの経緯と、関わりのあった当時の年齢、建物の建設時期の相関関係を分析すると、全体として共通のライフステージが8件の建築の上に存在する事が明らかとなった。このライフステージを地図上に個人の関わりに関する記述例と表示すると、図7のように表される。

この建築群とライフステージの関連性について、団体会員へのヒアリング調査を行ったところ以下のような回答が得られた。

「8つの建物と関わって一生を過ごす私たち、弘前と関わる人間は前川建築とともに過ごしているといっても過言ではないと思います。」【個人番号24】「確かにそういった関わりはある」【個人番号20】「考えてみればそういう事なのかもしれない。多くの人達が知らず知らずのうちに建物と心の一体化を覚えている」【個人番号7】「世代によって違うと思う。50代以降はそういった事があるようだが、建築群と若い世代との関わりは現代希薄になりつつある。だからこそ、教育者として学生に伝える立場にならなければと思う」【個人番号25】

このように、各建築物がライフステージとして、人生の節目、節目で経験されている事により、建築群が市民の人生における様々な年代の頃の記憶との結びつきを持っている事が明らかになった。

歴史的建造物とは異なり、モダンズム建築が結びつきを持つ記憶は近い過去のものであり、現代に生きる人々、個人やその関係者の固有の過去である。よって、個々によってその意味付けは異なるが、人々の記憶の結びつく対象が同一の建築物のまとまりである事により、社会の記憶との結びつきを持つものとして、社会的な価値を有すると言える。しかし、その一方でこうした意味付けがされているのは、「前川の会」の会員構成がそうであるように、50代以上の人々が中心であり、若い世代とは差異がある。個人のライフストーリーの上でこの8件が建築群として立ち現れてくるのは、高齢になってからであることもその一つの要因といえる。

4 市民活動の発生

モダンズム建築物の価値は、専門家以外には評価され難いと言われる中、本事例では自然発生的に市民活動が展開された。市民の間で、建築群に対する何かしらの共通認識があった事が団体の形成に繋がったという仮説のもと、活動への参加動機、建築群に対する認識を、調査、分析した。

4-1 各建築物に対する多様な評価

8件の建築物に対してどのような評価がされているか、自由回答形式のアンケート調査を行った。その内、建築物に対する評価がさ

建物機能関連	【研究所】「ここでコンサートをしたら、音がよく響くだろうと思いました。」【講堂】「高校にこのような講堂があってもいいなと思った。」【会館】「中・高学年時代に使用していた。音響効果がすばらしい建物として評価されていた。」「すばらしい音と空間、大好きなホールだった。行くのが楽しかった。」【弘前オペラ・バレエ等弘前の文化の中心として弘前の人々に愛されている】「音響効果に感心した。」【斎場】「読経もひびき、天窓から、本当に魂が岩木山に向かっていくような気がした。」「こんなに室内構成（光の注ぎ方）音響効果（読経の響き方）も素敵な斎場は他に知らない」
	音響効果に優れているものが多く、音楽文化が豊かな弘前市の文化の拠点としての認識がある
恒例行事・日常風景関連	【庁舎】「弘前に住んでいた時によく見ていた。弘前の風景の一部」【弘前工業高校に通学していたため、毎日通っていた。公園の堀と共に四季と町並みが調和していると気に入っている場所です】【会館】「隣接して通った高校があり、毎日のように市民会館の存在を感じていた。」【博物館】「公園に行ったときには市民会館といっしょに写真を撮っていた」【相談所】「弘前公園内にあるため、毎年桜祭りの頃に何げなく見ている」「弘前のさくら祭りや菊と紅葉祭りに行き、建物から桜、紅葉を眺めていた」「毎年桜祭りの期間中はここトイレに行ってしまう」【公園の散歩や、桜まつり、菊祭りの度にその美しさに目を楽しませていただいている」
	地域の日常風景と、恒例行事のある風景の一部として認識され、親しまれている
子供時代の原風景関連	【研究所】「古くてこわい建物という印象」「なぜか知らないがよく見に行っていた」「この通りを歩いて真っ白な建物に少々びっくりして立ち止まり、じくじく眺めていた」【講堂】「入学後、講堂が建てられた頃、あまりに立派で他校からうらまされるようなことがあったが、この講堂にふさわしい人間になるように、という話を先生がされていた」「卒業後初めて正門を入った瞬間、講堂が正面に現れ、胸が詰まった」【庁舎】「小学生の頃、この噴泉の上に登れたので屋上から桜につられて公園の桜を眺めていた。屋上のコンクリートのベントハウスの空間がこころ良かった記憶がある。毎年のように登っていた」【会館】「市民会館はいつまでも好きだと思っていた」「高校への通学路の途中にあり、打ち放しコンクリートの外壁の強さに感動を覚えた。」【博物館】「レンガはとても美しく、周囲との調和が素晴らしいと子供ながらに思っていた」「小・中・高生の頃、利用はしてないが弘前公園の広場から見ると博物館と市民会館が風景として一体化して捉えていた」
	幼少時代の記憶の中で、当時のデザインの先進性からくるインパクトと同時に地域景観の一部として認識している
意匠・デザイン関連	【研究所】「建築を学んでいる友人とツアーで初めて中に入り感動した」「何度見ても新鮮さがある。特にあの赤」「建物の姿も美しいが、モザイクタイルや建具金具にも感動を覚えた」【講堂】「当時としては大層だった。青森県にはまだこのようなホールがなかったからかもしれない」【庁舎】「階段を下りてくると、ちょうど外の景色が見え、中の静けさと通行人の非対称な感じがなんとなくおもしろい」【会館】「小学生の頃はコンクリートの打ち放しの仕上がりには違和感を感じていたが、今は斬新なコントラスト（周囲の風景）から心地よい印象を与えられる。」【博物館】「大きな窓（ガラスで囲まれた休憩ロビー）が好き」「どっしりとした雰囲気、大好きな建物の一つである」【相談所】「緑のなかでたずねている感じが気に入っている」「外観は60代になってから感じるようになってきた。」「1日朝～晩までこの建物にいたら光のうつろいがものすごく美しく感動した。いつまでも座って外を見ていてもあきることなかった。市民にはあまり知られず、すばらしい場所。」
	建物の外観や内部空間を芸術品のように各々の視点で楽しんでいる
精神的作用関連	【研究所】「居心地の良い空気を感じました。」【庁舎】「地味さとともに大人の空間を感じた。大人のとは、落ち着けるという意味を込めて。」【病院】「ホールは吹き抜けで開放感がある印象」【1階の待合室に広さを覚え、2階から1階を見て、広々とした空間にある種の明るさを感じた】【博物館】「1Fのレザーのソファにゆったり座りお茶をいただき、パンフレットを読む。ぜいたくな空間と時間だと思う」【相談所】「なぜかわからないけど、ここでの休憩はとても落ち着きます。」「作品展で、3日連続で朝から夕方まで会場にいるのですが、疲れません。人を中心に設計されているのに感心します」【斎場】「読経もひびき、天窓から、本当に魂が岩木山に向かっていくような気がした。」「祖母が亡くなった時、有料待合室に行く時のんだららの坂が恐ろしさを齎してくれた。後年、あの坂が黄泉比良坂をイメージすると教えていただき、本当に遺族の心に沿った建物だと深く感じた。もしかしてこの斎場は日本ではないかと思う。洋装の人間は、最後はどこに行くのか、斎場は道を示してくれているのかと思う。」「大きく、包容力のある建物だと深く感じた」「外観、内装、設備がすばらしく、弘前で死んだらこれなら魂が安心して岩木山に帰って行けるという感を持った」
	利用時の人々の感情に配慮された設計になっている事への利用者の実感がある

図8 市民の各建築物に対する主な評価

れている記述を抽出し、KJ法を用いて内容毎に分類した結果図8のように整理された。

評価内容として主に5つに分類された。各会員世代や職業に関わらず、多様な評価が行われている事が分かった。しかし、評価のあり方には、弘前の①音楽文化の豊かさ、②弘前城を中心とした都市構成③歴史的な街並④市民の弘前公園に対する意識と美術的関心の高さ⑤市民の岩木山に対する信仰の深さなど、地域や地域住民の特性が顕著に現れていることが、ヒアリング結果から明らかになった。

4-2 建築群としてのまとまりの意識

会則の活動目的に「建物を大切にしていこうことを目的とする」と、記されていることから、入会当時、各個人がどの建築物をどのような理由から「大切にしたい」と思い活動への参加に至ったのか、動機をアンケート結果から把握する。「理由」は、筆者が設けた6つの選択肢から回答者が該当するものを複数回答可で選択する形式をとった。結果を図9に示す。有効回答数が27あったのに対し、回答数が同一の選択肢の上ではほぼ一様に分布していることがわかる。これは、1つの「理由」に対し、該当する建築物を「全て」とした回答者が多くいたためである。入会当時から8件の建築物を個別にではなく、「群」として捉えていた会員が多くいたと考えられる。

項目に着目すると、「前川園男によって設計された建物である」、

「大切にしたい」と思う建築物とその理由	1	2	3	4	5	6	7	8
	研究所	講堂	庁舎	会館	病院	博物館	相談所	斎場
弘前の風景の一部である	8	7	13	9	7	9	9	9
日常生活の中で市民に活用されている	10	8	9	10	9	8	8	10
人生の記憶と密接な関わりがある	7	10	6	9	6	5	5	6
市民にとって思い入れの対象である	6	7	7	10	7	6	6	7
前川園男によって設計された建物である	10	10	9	10	7	10	9	11
観光資源としての可能性がある	6	6	6	7	6	9	7	7

図9 市民の建築群への認識

という項目と同様に「弘前の風景の一部である」、「現在も日常生活の中で自分や市民によって活用されているから」と回答した会員も多かった。市民会館は図4の建築群の形成過程にもあったように、市民が丸となり資金を募った事で建設に至ったという背景がある。しかし、現代の市民の間で、この歴史的な事実はあまり知られておらず、文化祭、卒業式、成人式等の人生の節目となる晴れの場で利用される事が多い事から現代でも多くの人の思い入れの対象となっている事がヒアリングにより明らかになった。

5章 団体活動の実態把握

建築物に対する各会員の評価のあり方は多様であったが、8件の建築でひとつの建築群が構成されているという、共通認識があった事から世代や職業を超えた団体が形成され、市民活動が可能になったと考えられる。次に、団体の活動経緯とその内容、運営手法、参加している会員の活動目的などを調査し、市民活動の実態を明らかにする。

5-1 活動に対する姿勢

もう一つの目的として、「前川の会」は「多くの人たちに知ってもらおう」事を活動の目的としている。知名度や関心を高める必要性に関して調査を行ったところ、「共に存在意義を考える人を増やしたい」と取り壊しの危機を意識し、建築群の価値判断をする機会が必要であるとする回答と、「建物を通して知る事がある」と、建築群から得られる知識があるとしている回答に二分された。（図10）後者の指す知識は、主に2つ挙げられ、建築家の培った建築技術を学ぶ他に、建物を通して地域について学ぶ事ができるという回答が多く見られた。前者後者ともに、その対象は市民とする記述が多く、観光客等対外的ではなく、対内的な活動である事が分かった。

5-2 活動の発展経緯

団体の活動内容の推移、会員構成の変遷、発展過程を図11に示す。活動発足から、現時点まで3度の拡大期があったことがわかる。「拡大期1」は、団体設立のため代表が友人に呼びかけた時期であり、専門家や行政関係者は少ない。そして、この時期の活動は主に木村産業研究所で行われていた。8件の内、唯一民間所有の建物であり、団体設立の際に研究所の所有者が顧問として団体と関わりを持っていたこと、代表が団体を設立する一番の動機となった建築物であったこと、8件の中でも市民にあまり利用されることが無く、認知度が低いことなどから初期の活動対象となっていた。「拡大期2」では

◀ 建築群を通して地域を知る

弘前は城下町であり、そのをとりかへむかひする前川さんの作品は古くかたっています。前川さんの作品はそれより身中。はいってかへる感じがたがいます。自然に外に目がいかれるそんな感じがします。これは、弘前にはきれいな風景があるからだと私は思います。これから私が弘前の良さを知っていただくため、このようにたくさん残してくれてのことにと思います。／前川氏の作品処女作から、晩年の8作品は、市民の宝として／前川の建物はつては、ある建築家と弘前の出会いといへ、非常にユニークな面があるのを知ってもらうために、弘前の新しい魅力方を伝えるに思っています。昭和6年に前川によって増田第1に建築された記念碑的な建築物である弘前公園、弘前において第二次大戦後の特殊な文化活動の中心としてのシンボリックな建物であるという歴史的な経緯を知ってもらいたいという郷土史的関心から。／建物がその町の印象をつくるというところがあると思う。前川園男の建物8つ現存しているのには様々な偶然が幸いしていると思うが、一番は建築家本人の人間が投影されているからだと思います。その街に生きていることと幸せな人生と伝えたい。／すばらしい建物が弘前にあるから、多くの人が知ってくださるのうちにその建物と心の一化を覚えてい。そういう中で、私を含め、多くの人がその建物をもっている意味、建てる人の想い、そして、弘前の自然との関係などを知るとなるととても重要なことで、多くの建物を文化財として、心にとめることになる。自分達の住んでいる地域の財産を今後大切にしていきたいことにつながっていくと思う。／弘前には400年前の建築物、明治大正時代の木造洋風建築物等が沢山あり、そのどれもが街に貢献してくれている。その中の現代の前川の建築物である。街に融け合っていないはずだ。だから市民一人一人よくわかってもらいたい大事にしたいなと思うのだ。それと弘前という街だからだ。

◀ 建築群を通して建築技術の発展を学ぶ

弘前市内には川村氏の作品が初期から晩年まで各作品毎に鑑賞館にあることが素晴らしい。作品の一つ一つに個性があり環境に共生して現在も使用され市民に愛されている。歴史的にも芸術的にも高い価値があると思うので、多くの方々に知ってもらい重要な文化財として後世に残すことが必要だと思います。／弘前にある前川建築は、その歴史的背景、近代建築の日本における季節感の事象に対する苦悩、対応の手段が永続的に理解できる環境で起っていると思います。／わが国の近代建築の礎を築いた前川國男がこの一帯で都市計画にもおもしろく、大冒険である「木村産業研究所」もあつた。前川の建築は常に勉強するまで弘前に来ればすべて見ることができる。『前川の建築』は九十年代にチーム・バリーとしてブランドではなく、実際に利用してみても機能性も兼ね備えた秀作であると思う。その理由が市民の理解が深まっていると思う。デザイナー・木村トシを待たずに意外な利用、拝見しているが、前川作品は思いやりや、やさしさを感じる。市民会館のホールでも落ち着く。市役所の休憩コーナーなども設備が素晴らしい。

図 10 建築群から得られる知識

時期	参加人数	利用建物 (対象建物)	活動内容	職種別参加状況 (27人中 人)			
				その他	教育関連	建築関連	行政関連
H14	100	研究所	木村産業研究所での コンサート・イベント	5	1		
H15	60	全建策	フチグラッドパサツアー	2	1	1	1
H16	230	講堂	椅子補修プロジェクト	12	3	1	2
	10	研究所	クリスマスリース作り	2	1	(H16 発会)	
H17	数名	(講堂)	中央高校講堂模型作り	1	1		
	不明	全建策	前川作品見て歩き	4	1	1	1
H18	230	講堂	生誕100年祭1日目	10	3	3	4
	600	会館	生誕100年祭2日目	11	2	3	4
	不明	研究所	カセットプラント展示	7	2		1
H19	数名	(全建策)	みどころマップ作成	1	2		1
H20	数名	(全建策)	100年祭記念誌刊行	3	1		1
	25	全建策	前川國男の建築ツアー	6	3		2
H22	数名	(全建策)	ガイド作りマップ作成	1	4	1	1
	数十名	講堂	ときのわすれもの講演会	8	3	1	3

図 1-1 活動の拡大の経緯

中央高校講堂の椅子補修プロジェクトを通し、会員が増えている（注釈13）。中央高校講堂は後に講堂の耐震問題が懸念され、所有者である県は、取り壊し、跡地を駐車場として利用する意向を示したが、団体に所属する専門家や県職員による働きかけと、椅子補修の取り組みの結果から、耐震補強し保存をする意向へと移行しつつあることがヒアリング結果よりわかった。「拡大期3」にあたる時期に行われた「前川國男生誕100年祭」は、前川建築設計事務所が全国各地域で前川國男の生誕100周年を記念して展覧会を行う際に、弘前も開催地のひとつとする事が提案され、「前川の会」に協力を依頼したことから行われた注釈14）。大規模な活動が行われ、行政関係の会員が更に加わり、この後の行政と団体に関わりを持つ重要なきっかけとなった。

このように、現在は8件の内6件を所有する市、1件を所有する県、

そして財団法人、教育者、学生、地域の枠を超えた建築関係の専門家等との関係の構築が図11下のようにされていることが明らかとなった。また、図12のように建築群が形成される中で関わった人物を文献調査により追うと、現在の活動の中心人物はその形成過程の中で育まれた人的ネットワークからきている事が明らかになった。

図12 建築群形成過程で育まれた人的ネットワーク

6章 市民活動による価値の醸成

3章では、建築群が団体会員のライフストーリーが集積する場となっていた事、4章では市民が活動を共にする基盤として建築群のまとまりに対する共通認識があった事、5章では活動への多様な主体の参加による、輪の広がりがあった事が明らかになった。6章では、文献調査と、会員の認識や利活用率の変化を通し、建築群に対し市民活動が行われる事により会員間で育まれる価値を明らかにする。

6-1 市民ライフヒストリーの共有

活動内容の詳細を追うと、市民が持つ建築群に関する情報の共有が行われている事が明らかになった。「生誕 100 年祭」が行われた際には、会員が執筆した記事が地元の新聞に 24 週に渡り連載され、週毎に様々な視点で前川建築が紹介された。記念誌に付属された DVD の作成では、専門家による建築物の説明に加え、建設当時や、数十年前の様子について会員が市民へのインタビューを行っており、1000 部の内一部会員を中心に記念誌と共に配布され、他は地元の書店で販売された。

団体活動を振り返った内容が会員により詳細に記述されている連載記事^{注15)}の調査を行った結果、会員間の情報共有に関する記述として以下が抽出された。

「一部の人の記憶には残っていたと思う建築家・前川國男の人和と前川にある作品の紹介に努めた」「一度紹介するとなわくするような発見やドラマがあったり、温かい人とのコミュニケーションがとわくする。前川にある前川國男の8つの建物はそんな尽きぬ魅力の発信地だ!」[2006.6.17/ 個人番号15]「多くの方々と接する機会を得た中で垣間見たのは、名だたる建築家、教育者達が、前川について畏敬の念を示し、なごやかに話される姿であり、またボランティアで黙々と築くように願ってくれる市民の顔でした」「市井の人も、専門家も包み込む前川の懐の大きさを再認識した日々でした」[2006.6.24/ 個人番号8]「Yさんにはこの市役所会館で体験したバレーの発表会の記憶を鮮明に覚えていて、上映したビデオの中でも楽しくうに語ってくれました」[2006.7.8/ 女性]「『建物を大切にすること』ことは先人の思いを大切にすることであり、人としての生き方にかかわってくるということでもあるという思いを深くいたしました」[2006.7.15/ 女性]

このように、椅子の補修や、アート作品の作成時等、作業の中で情報共有が行われていた事が分かる。この情報共有の中で、他の市民の建物に対する思い入れや、建物の関わり等の共有がされていた。

入会後、活動を通して認識が変わった建築物とその理由をアンケート調査した結果、図13のようになった。建築物に関しては、椅子の補修を行った「中央高校講堂」に各項目の回答数が集中しているのがわかる。また、項目に着目すると、「自分以外にも多くの市民

図 1 3 入会後の建築物に対する認識の変化

が大切にしている建物だと知ったから」に回答が集中している。

活動への参加動機に関する会員のアンケートの回答に着目する。

「弘前において第二次世界大戦前の特殊な文化的活動の中心としてのシンボリックな建物であるという歴史的な経緯を知ってもらいたい」【個人番号 6】「何も知らずに建物と付き合ってきたが、その中から一つでも二つでも光をあてて、自分も興味・関心を持ち、知的財産を増やしていくことが人生の醍醐味だと思います。」【個人番号 5】「ある建築家と弘前の出会いという、非常にユニークな面があることを知ってもらうことで、弘前の新しい魅力発見になると思う」【個人番号 1 3】「前川國男の人間が投影されているから 8 つ今も現存しているのだと思う。そんな街に住んでいることが幸せなんだと伝えたい」【個人番号 1 5】「『前川の会』を進めるスタッフの熱い想いを共有したいと思いました。」【個人番号 7】

このように、他の市民と情報の共有をする場を求める声が多い事がわかる。今後の活動の中で、市民同士がコミュニケーションをとる場を増やす事により、建築群が多くの市民の思い入れの対象である事を実感し、他者の経験談を通し新しい魅力を発見する事により建築群に対する価値の認識が高まり、活動の促進に繋がると考えられる。

6-2 建築群に対する共通認識の強化

3-2-1 で図示した建築物と個人の関わり、団体活動の経験に関する記述も含めると図 1 4 のようになった。3 章で明らかになったライフステージの様に、年齢を重ねる事で利用する機会が減る建築物があるが、活動を行う事でまた利用する機会が得られている事がわかる。

日常生活での利用回数の変化は図 1 5 のようになった。

図 1 4 活動を通した関わり

図 1 5 全体の利用回数の変化

「病院」や「斎場」に関しては、その用途の関係からも、利用回数の高まりはあまり見られなかったものの、弘前公園一帯の利用率が上がっており、「木村産業研究所」も公共施設ではないのにも関わらず利用数が高まっているのがわかる。入会前は一部の建築物しか利用をしていなかった会員が活動を通し新たに他の建築物も利用するようになった事が図から読み取れる。各建築物の利用数が高まる事で、ライフストーリーの更なる蓄積と、情報を共有するための接点が増えると考えられる。

6-3 小括

建築群に対する保全・保存の意識は、他の市民との情報共有を通し、同じ建築群に対する他の市民の思い入れを知る事により高まっていた。また、活動に参加し、今まで利用する機会が少なかった建物に関する知識や情報を得る事により、日常生活の中で以前より利用率が高まったという傾向が全体的として見られた。活動の中で得られる知識や情報は、多様な世代や職業の人々と交換されるため、各建築物に対する建築的視点、教育者視点、利用者視点等、様々な評価のあり方に触れる事ができる。そして、単体の建築物ではなく、建築群を対象とする事で、入会前までは関わりが少なかった建築物にも自然と触れ、情報を得る事ができる。よって、上記のような結果が得られたといえる。これは、活動の対象が単体の建築物ではなく、建築群である事で生じた影響であり、建築群というまとまりに対する会員間の共通認識の強化にも繋がっている事が明らかになった。

7 章 結論

3 章では、青森県弘前市に現存する 8 件の前川國男によるモダンイズム建築は、同一の建築家により設計された建築物の集合体であるだけではなく、市民のライフストーリーが蓄積する場であるという点で関連している事が明らかとなった。

市民のライフストーリーとの関係に関しては、市民が世代毎に経験するライフステージの集合体であり、多様なライフストーリーが蓄積する場となっている事が明らかとなった。ライフストーリーの蓄積は人々の生活の記憶の蓄積であり、地域の記憶の積層である。よって、このライフステージの集合体としての建築群は地域文脈そのものであり、社会的価値を有すると考えられる。

個人のライフストーリーの中で、関わりを持つ建築物の数は限られている。しかし、関わった建築物が含まれた建築群を対象とした活動に参加し、世代や職業の枠を超え、他の市民と関わる事により、他者の経験を通し他の建築物を経験し、多様な市民の歴史として共通の記憶を育む事が可能となる。それは市民にとって、身近な日常の新しい一部として、その地域文化や風土を知る事にも繋がり、市民活動が各市民のライフストーリーの延長となっている事が明らかになった。そして、このような共有の場は、建築群が形成される過程で育まれた人間関係と、豊かな文化活動の場がある事によって支えられていた。建築群の価値を引き続き醸成してゆく為には、これらの関係性を保ち、活用してゆく事が必要とされる。

8 章 考察

本事例では昔の記憶を呼び起こす装置としてモダンイズム建築があり、それが群として存在する事で市民が自らの人生や地域の文脈を常時読み取る事のできるネットワークとして市民生活の中で重要な